

## ウエヌスとアモルの変容 —恋愛と贅沢とモラルをめぐる考察—

### (I) 古代社会における恋愛と贅沢とモラル

前野 みち子

#### 序

〈愛の矢に射られる〉〈愛の鎖に繋がれる〉などの表現は古くから存在し、恋愛が受動的な情念、恋する者自身の思うに任せぬ情念であることを示している。古代ギリシア人はあらゆる情念を外から受け取るもの＝受苦 *pathos* と捉えたが、とりわけ恋をめぐる文学伝統のなかで、この比喩形象は近世においてもなお大きな力をもっていた。本稿では、アモルによって恋におちた者が、その母、性を司るウエヌスの支配下に入るといふ古典的図式とこの母＝息子の寓意的表象が、ローマ古典期からキリスト教化した中世にかけてどのような変容を蒙り、その後、とりわけ中世末に急成長を遂げた北ヨーロッパの商業都市でどのような姿をとるに至ったのかという経緯を、都市＝恋愛＝流通の関係とそれに付随するモラルの問題に焦点を当てて考察してみたい。

#### 第一章 エレギアのアモルとウエヌス

ティブツルス（前五五頃、前一九）は『エレギア』巻二、第四歌で、アモルの鎖に繋がれた我身を次のように嘆いている。

こうしてぼくは 自分のために手に入れた隷従と  
とを見ている。 女主人

いざ、父祖伝来の自由よ、さらば

実に悲惨な隷従が与えられ、ぼくは鎖で縛られている。

アモルは惨めなぼくから決して枷はずさず、  
ぼくが何に値しようが、何を誤ろうが、ぼくを焼く。

(一～四行)

アモルの鎖に繋がれた男（多くは詩人自身）が恋人を「女主人」*domina*と呼んで崇拜し、彼女に「隷従」*sevitium*して（つまり、ローマの自由市民であるのにその自由をなくして）奉仕に努めるといふ行動様式、後のヨーロッパ中世において〈宮廷風恋愛〉の規範として定着するに至るこの行動様式は、ローマ風エレギアにその一つの淵源をもつと言われる。アモルだけでなく、ウエヌスも恋する者を枷に繋ぐ神として登場することがあるが、<sup>2</sup>例えば、「当時はアモルが息を吹きかけた人々に、やさしいウエヌスは／公然と谷間の木陰で喜びを与えた」（ティブツルス、巻二、第三歌、七五～七六）と歌われるように、まず息子のアモルがその矢を射て恋心を吹き込み、母親のウエヌスが性愛へと導く<sup>3</sup>という母子息子の

の役割分担と協力関係がローマ古典期には一般的だった。<sup>4</sup>ところがこの淵源においてすでに、恋人すなわち「女主人」は奢侈文化を謳歌する象徴的存在として描かれるのを常としていた。詩人は「泣きながら、閉ざされた家の前に寝ることのないように」<sup>5</sup>是非とも「贈物を手にいれなければならぬ」（二二～二行）のである。

おお、誰にせよ、緑のエメラルドを拾い集め、白雪色の羊を

テュロスの紫に染める人は、滅びよ。

彼の人は乙女らに貧欲（*avaritia*）の原因を与える。そし

1 ローマ風エレギア詩人の詩は、中山恒夫編訳『ローマ恋愛詩人集』国文社、一九八五、所収のもの（カトウツルスの一部、ティブツルス、プロベルティウスのすべて）に関してはその訳を用い、一部必要に応じてラテン語原文から訳し直した。ラテン語原文は、cf. *Cornelius Tibullus and Propertius Venenis*, The Loeb Classical Library, 1976; *Propertius Elegies*, The Loeb Classical Library, 1990.

2 ティブツルスの詩集には「ウエヌスの枷に首を縛られ」（巻一、第二歌、九二行）／「ウエヌス御自身が魔法の結びで多くの腕を縛って、手ひどく笞を打ちながら、徹底的に教えてくれた」（同、第八歌、五～六行）等々、作者不詳『スルピキア名歌選』（『ローマ恋愛詩人集』所収）には「あなたも、

ウエヌスよ、不公平であつてはならぬ。二人とも等しく縛られて／あなたに仕えるようにするか、それともわたしのいましめを解け」（第四歌、一三～一四行）、プロベルティウスの詩集には「つかまえられて、ウエヌスの残酷な銅鍋で煮られていた。／両手を背中にまわして縛られていた」（巻三、二四歌、一三～一四行）、等々の詩句がある。

3 エレギアは「性愛、性行為」の意味のみを表わすようなウエヌスにもしばしば言及するが、その場合でも大文字の固有名詞を用いており、女神としての神性を付与されるのが一般的である。

4 もちろん例外もある。とりわけ、エレギアの創始者とされるカトウツルスは恋愛の神としてしばしば「ウエヌスとクピドー」を同列において名

指す（カトウツルス、第三六歌、三行）だけでなく、何度か「ウエヌス  
らとクピドーら」と両者を共に複数形にして用いている（同、第三歌冒頭、  
第三一歌一行など）。カトウツルスがウエヌスの息子神を「アモル」(love、  
友愛、神への愛なども含み、amorの意味は幅広い)と呼ばず「クピドー」  
(cupido = wish, desire)と呼ぶのは、この名が(愛の)「欲望」、情念その  
ものを意味するからではないかと考えられる。したがって両者の複数形  
は、神話上の神々に擬された恋にかまける巷の男女(第三歌、あるいは  
恋にまつわる情念と行為(第十三歌)そのものを暗示すると言えらる。こ  
この文脈でもう一つ興味深いのは、恋の情念を表す巧みな表現として後  
世によく知られたサッポアの「甘くて苦い」(断片一三〇) 感覚について  
のカトウツルスの読み替えである。サッポアはこの断片で明らかに恋(エ  
ロースニアモル、恋の情念)に呼びかけており、したがってこの句も本  
来的にエロースと関わっているのだが、サッポアを意識するカトウツル  
スのほうは敢えて「甘い苦みを悩みに混ぜる女神」(第六九歌、一七〇一  
八) すなわちウエヌスと関係つけて歌う。つまりカトウツルスは、レス  
ビア(この名はもちろんレスボス島の女性詩人サッポアを意識している)  
との恋愛関係を情念と行為に弁別しがたいものと意識していたように見  
える。このあたりにも現実の恋に苦しんだ彼と、それをジャンルおよび  
型として継承したといわれる一世代後の詩人ティブッルス、オウイディ  
ウスなどとの差異が現われているように思える。cf. *Poetarum Leschorum  
Fragmenta*, ed. E. Lobel et D. Page, 1955, Oxford. 『呉茂一訳詩集花冠』紀  
伊國屋書店、一九七三、二二三頁。

5 扉の前で閉め出された恋人の嘆きは、ギリシア新喜劇→ローマ喜劇  
(プラウトゥス) から受け継がれたローマ風エレギアの一つだっ  
た。この場面設定は本来的に南ヨーロッパのセレナードの風習と関わっ

ており、すでに前六世紀の抒情詩人アルカイオスの詩に見出せるという。  
アリストパネスも、『女の議会』(前三九二年上演) でキュプリス(「ウエ  
ヌス)に狂った若者に「開きたまえよこの扉/承けたまわさばわれはは  
や/玉の緒絶えて打伏さん」(『ギリシア喜劇全集』II、人文書院、一九  
八〇、所収、村川堅太郎訳、九六二―六四行)と語らせている。cf. E.  
Burck, *Das Paraklausithyron. Die Entwicklungsgeschichte eines Motives der  
antiken Liebesdichtung*, in *Humanistische Gymnasium*, 43, 1932, pp.186-200.  
また前三世紀初頭のアスクレーピアテースの恋愛詩(『呉茂一訳、前掲書、  
五・一四五)では、恋する男が恋人の家の扉(門口)に花環を掛け、そ  
の花環に向かって自分の思いの丈を語り嘆いている。この花環もおそら  
くセレナードに起源をもつものだろう。少し下った牧歌の創始者テオク  
リトスも恋人の家の扉や門、花環(花冠)に言及している(『エイデュリ  
ア、第2歌、テオクリトス『牧歌』古澤ゆう子訳、京都大学学術出版会、  
二〇〇四年)。ローマの詩人はこのトポス化した(恋の思いを阻む扉)を  
さまざまな創意とともに扱った。カトウツルスは扉を擬人化して詩人と  
対話させているし(第六七歌)、プロペルティウスは同じく扉を擬人化し  
つつ、自分の目にしたものを独白させている(巻一、第一六歌)。ホラー  
ティウスには、もはや蝶番を動かすこともなくなった盛りを過ぎた女の  
家の扉を歌う挿歌(『カルミナ』巻一、第二五歌)と、より典型に倣っ  
た嘆きの歌(巻三、一〇)があり、ここでは「贈物」にも触れられている。  
ティブッルスの場合、巻一第二歌がその典型的なもので「花環」にも言  
及されるが、その他の詩でも「扉」にまつわる場面が寸景として現れる。  
ここに引用した詩では、扉の出入りを贈物の多寡と結びつけることによっ  
て当世風の恋を支配する金銭の力を挿歌するのである。

てコースの衣服、

赤い海から取れる輝かしい貝。

これらが乙女らを悪くした。こうして扉は鍵を知り、

犬は玄関番になり始めた。

だが大量のお金を持ってくれば、見張りは敗れ、

鍵は邪魔せず、犬さえ黙る。(二七〜三四行)

東方の遠い地域で「拾い集め」られた「緑のエメラルド」、  
「テュロス」<sup>7</sup>（レバノン西部の古代都市）産の紫貝から作る染料、  
ギリシアの「コース」島産の絹織物、「赤い海」（ペルシャ湾から  
アラビア海にかけての海）で採れる真珠、地中海を隔て、さらに遠  
方の海からもたらされる交易品は、服飾に浮き身をやつす遊び女  
たちの関心を惹いてやまない贅沢品だった。<sup>8</sup> ティブツルスはこ  
の直前の歌（第三歌）でも、「ああ、ああ、ぼくは見る、乙女ら  
が金持を喜ぶのを。／さあ、略奪物は来るがよい、もしウエヌ  
スが富をお望みなら、ぼくのネメシス<sup>10</sup>が贅沢（luxuria）に浸り、  
ぼくの贈物によって／目立つ姿で町中を闊歩するように」と、強  
欲な恋人ネメシスに翻弄される自分をもてあまし気味に嘯いてみ  
せる。

同時代に生きたプロペルティウス（前五〇頃〜前一五頃）もまた、  
貧欲な「乙女ら」について歌っている。

君らは尋ねる、どうして乙女らは貪欲で（avidus）、夜が  
高くつくのか、  
そうしてウエヌスに吸い尽くされた財産は、損失を嘆  
くのかと。（『エレギア』巻三、第一三歌、一〜二行）

ウエヌスを金と結びつける言説<sup>11</sup>は、ギリシア新喜劇を受容し  
た前二世紀以降のプラウトゥスやテレンティウスに代表される  
ローマ喜劇で定番となっており、これらの喜劇から多くを受け継  
いだエレギアのトポスともなった。古代ギリシアの喜劇は、ヘレ  
ニズム期以降、それまで演劇を生み育ててきた公的・ポリス的共  
同体の枠組みが緩んで解体に向かうにつれて、私的生活にまつわ  
る笑いを主たるテーマに据えるようになり、金で買われる遊び女  
（妓女）がその欠かせぬ登場人物となった。詩人が自身の恋を歌  
う形式をとるローマ風エレギアにおいても、彼はいわば自身の手  
になるシナリオの恋する人物役を自演し、その恋人である「乙女」  
あるいは「乙女ら」puella/e（その実態は高級娼婦的な生活を営む女  
たちだったと言われる）もまたこの舞台の女主人公として典型化さ  
れる、というのが創作上の約束事になっている。高価な贈物を欲  
しがる「乙女ら」のイメージは、その典型的な性格の一つなので  
ある。恋人に愛着する詩人は、詩人としての矜持とともに金銭で

は贖えぬはずの比類なき贈物、すなわち自ら作った詩を献上するが、この思いは現物志向の貧欲な彼女たちには通用しない。このような乙女像は、オウイデイウスに至るとますます強調されて滑稽味すら帯び、エレギアは恋に翻弄される貧しく哀れな詩人の自嘲気味の戯れ歌に近いものとなる。

しかし、先に引用したティブッルスの詩句は、〈昔〉と対比された〈今〉の世相を歌ったものであることにも注意しなければならぬ。かつて、「乙女ら」は善良で、「扉は鍵を知」らず、「犬は玄関番」ではない時代があった。

プロペルティウスもまた、前述した冒頭の二行に続けて、この破滅的現状の「原因は全く確実明瞭」で、「贅沢のために 余りにも自由な道が切り開かれている」からだとして述べている。この逸

- 6 プリニウス『博物誌』(第三七卷(宝石))のスマラグドゥスの記事(二六―一九)によれば、スキュタイ産のものが最良、二番目にバクトリア産、三番目にエジプト産とされている。
- 7 ティブッルスは「初めて船を 風に委ねることを覚えたテュロスの町」(巻一、第七歌、十九行)とも歌っており、このフェニキア人の古代都市が船を操る交易によって繁栄したことを暗示している。因みに、ローマと戦ったカルタゴはこのテュロスの植民市である。
- 8 「サモスの陶器」「クーマエのろくろで形作った滑らかな土器」などは酒盛りを彩る小道具である。ティブッルス、巻二、第三歌。

樂の状況はおそらく、長い内戦時代に終止符を打って初代ローマ皇帝アウグストゥスが樹立した(ローマの平和)<sup>パクス・ローマナ</sup>がもたらしたものであり、彼の時代にはより多くのローマ市民がかつては富裕民に限られた「贅沢」*luxuria*を求めて、その一部なりとも手に入りたいと願うようになっていた。そしてこの「贅沢」を演出したのが、地中海地域に建設された数多くの植民市や帝国の支配圏に入った広大な属州、さらに遠方から流れ込む豊富な奢侈品だったのである。「切り開かれ」た「自由な道」のお蔭で、インドからは黄金が、赤い海(インド洋とペルシア湾)からはウエヌスの貝(真珠)が、テュロス(レバノン西部の古都市)からは染料用紫貝が、そしてアラビアからは肉桂が来る(五―八行)というプロペルティウスの詩句から、この道は海上の貿易路を意味していたことが分

- 9 この「略奪物」とは同詩三九行に「鉄の世代はウエヌスではなく、略奪物を賞賛する」とあるように戦利品だが、武力によって植民市、属州を急速に拡大していたローマにとってそれは交易品と重なる意味をもっていた(注14も参照)。
- 10 エレギア詩人は自身の詩のなかで常に決まった恋人の名を挙げる。カトゥルゥスはレスビアを、ティブッルスはデーリアとネメシスを、プロペルティウスはキュンティアを崇め、そのためにエレギアを歌うのである。
- 11 「彼(アモル)は若者から財産を奪い、」(ティブッルス、巻二第一歌、七三行)のようにアモルを金銭(贈物)と結びつける詩句も時には見られる。

かる。ティブツルスとプロペルティウスが言及する奢侈品の細部はかなり似通っており、少なくとも贅沢好きの女性の欲望の対象としてこの時代のステレオタイプをなしていたと思われる。不幸なことに、この「あまりにも自由な」商業路の発達はモラルの破滅を招いたと詩人は言う。「こちらの妻たちの種族は不実で、こちらでは乙女は誰も／誠実なエウアドネ<sup>12</sup>でも 敬虔なペーネロペーでもない」(二三～二四行)。

しかし、「贅沢」を知らなかった(昔)はこのようではなかった。

その昔、田舎の人々は 平和の中で幸せだった。

彼らの富は 取り入れと果樹だった。

彼らにとって贈物は 枝から振り落としたマルメロの実、

またざる一ぱいの深紅の木いちごを与えること、

あるときはすみれを手で摘み、あるときは輝く百合を

混ぜ合せて、乙女の籠に並べて持ち帰り、

またぶどうをその葉に包んで運ぶこと、

あるいは玉虫色の羽毛の生えた 色とりどりの小鳥を。

するとこれらの誘いの品で 買われた秘かな口付けを

乙女らは森に住む男たちに 谷間<sup>あひ</sup>で与えたものだ。

子鹿の皮が恋人たちをすっかり覆い、

丈の高い草が茂って 自然の床を作り、

松は覆いかぶさって、しなやかな影を周りに投げていた。  
裸の女神たちを見ることさえも 罪にならなかつた。

(二五～四三行)

奢侈品溢れる同時代の罪深い都市 *urbs* と自然溢れるかつての素朴で牧歌的な田舎(アルカディア、田園)の対比、そして、流通によって世界に開いた自由な都市と自給自足の閉じた田舎の対比。流通が、交易が、モラルの墮落をもたらすという言説の農耕礼賛的・農本主義的イデオロギーは、ウエルギリウスが『牧歌』(前三七年公刊)第四歌で朗々と歌い上げた、かつて存在し、近い将来ふたたびめぐり来るはずの黄金時代のイメージとも重なるものである。「交易の舟人さえも海から退き、松の木造りの船も／商品を運ばなくなる」その時代は、「すべての土地がすべてを生み出し」(三八～三九行)、人々が労なくして幸せに暮らせる豊かな自然の理想郷である。「交易の舟人さえも」というのは、軍人と軍船が海から退くことが前提とされるからである。また、黄金時代の平和が訪れる前の不可避のプロセスとして「アルゴー船」のもたらす戦争が暗示される(三四～三五行)のは、ギリシア・ローマの英雄時代の内実が奢侈品掠奪を目ざす戦争の時代でもあったというウエルギリウスの認識を示すものである。そしてさらに、ティブツルスの友人でもあったホラーティウスは、この田舎と都市の

対比を、ウエルギリウスのようなめぐり来る時としてではなく、共時的な地域差、民族差として、すなわち実り豊かな土地に住む未開ながら徳高いスキュタイやゲタイの民と、「道に外れし殺戮と内乱の狂気」とらわれ「荒れ狂う放縦」に身を委ねたローマの民との対比として、その『歌章』(前二八年ころ)<sup>13</sup>巻三第二四歌に歌っている。ここでも、「商人を遠ざけることがなく、熟練せる水夫が荒海をのりこえ」て遠方に出かけていくことが、すなわち交易に携わり交易を享受することが、「けわしい徳の道を棄て去」ることとして表象される。これらのテキストが、暴力によってではなく交易によって目的の品を手に入れることさえも否定的

に捉えるのは、平和裡に行われうるはずの交易がしばしば諍いを生み暴力に直結する、そのような事例が古代地中海世界の歴史に蓄積されてきたという事実からも理解されるだろう。交易を保護しその圏域を拡げる軍隊(暴力機構)の役割、そしてカエサル『ガリア戦記』(前一世紀半ば)にも暗示されるその逆転現象、すなわち征服する軍隊の先遣隊として、欲望と不和をもたらす商人・商業(交易)<sup>14</sup>の果たす政治的機能、これらは都市の恋愛と流通、そしてモラルの関係を考察する本稿においても、その外延の問題連関をなしている。

農耕に民族のルーツを見るローマの伝統<sup>15</sup>以降、延々と繰り返

12 エウリピデスやアポドロロスによれば、イピスの娘エウアドネーは夫カパネウスの火葬の火に飛び込んで殉死した。妻の貞節の鑑とされる。ただし、このような寡婦の供犠自殺はギリシア世界ではほとんど類例を見ない。cf. *Der Kleine Pauly: Lexikon der Antike*, dtv, 1979, Artikel: Euadne.

13 ホラーティウス『歌章』藤井昇訳、現代思潮社、一九七三。

14 『ガリア戦記』は、ガリア人やゲルマン人のなかで、葡萄酒や奢侈品を扱う商人たちがめつたに行き来しない民族が総じて勇猛果敢であると述べている(巻一、一／巻二、一五／巻四、二／巻六、二四などを参照のこと)。この事実を踏まえて蛮族に商人たちを積極的に送り込み、その後には戦争をしかけるという戦略も使われた。それまで酒や贅沢を知らなかった民族を籠絡し諍いの種を蒔くこともローマの戦略の一つだった。

15 もちろんどの民族も文明化の過程で都市成立以前の農耕の記憶をと

どめており、ヘシオドスの五つの時代の説話(『仕事と日々』前七〇〇年前後に成立)でも、最初の人間である黄金の種族が生きた時代のありさまは、ウエルギリウスと同様、「豊かな耕地はひとりで、溢れるほどの／豊かな稔りをもたらし、人は幸せに満ち足りて／心静かに、気の向くままかせて田畑の世話をしておた」(松平千秋訳、岩波文庫、一七七一―一九行)と語られている。しかしヘシオドスにおいては、平和で労苦のない農耕・田舎が富と悪徳をもたらす交易都市と対比されイデオロギー化されることはなかった。「正義」が行われる国では耕地が稔りをもたらし、「船を用いて海を渡ることもない」(二三五行)が、寒村の現実にあつては「良き暮しを求めて、いく度も船で海を渡」(六三五行)ることも肯定されている。そしてギリシア最盛期の政争と戦争に明け暮れたポリス市民にとつても、平和への願望と農耕を結びつける観念連合は稀薄だったように見える。

されてきた田舎と都市の対比のトポス、そしてまさしくこの場トポスに規定されたそれぞれの恋愛の型は、当然ながら、そこに登場するアモルとウエヌスの形姿と振舞いにも反映されている。ティッルスは農場を浄める祭りを歌う詩のなかで、「クピドー自身もまた、畑の中で、家畜の間で、／そして飼ひ馴らされぬ雌馬の間で 生まれたと言われる」（巻二、第一歌、六七〜六八行）と述べている。田舎で生まれた悪戯好きの子供の神は、自然の繁殖を助けて「未熟な弓を稽古し」（六九行）だが、今では巧みに都市の乙女や若者、時には老人にまで矢を射かけ、大きな傷を負わせている。つまり都市の洗練された恋こそが、贅沢への嗜好や贈物とともにモラルの墮落を引き起こしたというのである。それでは、この古典的トポスを背景にもつ異教の母―息子神と彼らの司る恋愛は、ローマのキリスト教化によってどのような変容を蒙り、その後の中世にどのような形で受け継がれたのだろうか。

## 第二章 プルデンティウスにおける〈恋愛〉表象

ローマ帝国の古典文化を受け継ぎ、その解体期のキリスト教西方教会を代表したラテン語の著述家たち、アンブロシウス（三三三―三九七年）、アウグスティヌス（三五四―四三〇年）、ヒエロニムス（三四〇頃―四二〇年）などに比較すると、プルデンティウス（三四八―四〇四年以降）の存在感は大分薄れるが、中世から近世ヨ

ロッパに流行したアレゴリー文学の伝統を考える場合には、その著作、とりわけ『プシコマキア（靈魂をめぐる戦い）』がそこに及ぼした多大な影響は誰しも認めざるをえないだろう。本章ではこの作品を中心に、ローマ風エレギアに見られる都市恋愛―流通とモラルの問題連関が初期キリスト教にどのような形で流れ込み、中世への橋渡しをすることになったのかについて探ってみよう。

この時期にキリスト教のための著作を残した人々に共通するのは、ローマ文学・修辞学についての、つまり異教文化についての深い教養と学識である。三二三年にコンスタンティヌス大帝によって公認されたキリスト教は、テオドシウス帝によって国教化された後も、この世紀末になってなお異教復興運動に直面しており、古代ローマが寛容に受け入れたさまざまな異教を排除しきれないなかった。<sup>16</sup> 異教の伝統に根ざしたローマ古典もまた、有産層の子弟に施された文法学校や修辞・弁論学校での教育を通して脈々と生き残り、ラテン語で著述する人々の言語イメージと修辞使用を規定し続けた。プルデンティウスがその全詩作品の序で、「最初の時期（少年期）は（教師の）うなる鞭に泣いた、それから偽りのトガ<sup>17</sup>（青年期）が欺いて嘘をつくことを教えたので罪を犯さずにはいなかった」<sup>18</sup>と回想しているように、文法学校から修辞（弁論）学校へという教養人育成コースを辿った人々は、この時期にラテン語古典作品の知識を山ほど詰め込んだのである。



プルデンティウスの著作に、ルクレティウス、ホラーティウス、ウエルギリウス、カトウツルス、オウイデウスなど、さまざまな古典文学の影響が指摘されているはそのためである。

16 この異教復興運動に積極的に関わったローマ市長シユンマクス(二四〇?~四〇二年)に対しプルデンティウスは弁駁書を著しているが、この人は当時ローマに滞在したアウグステイヌスを弁論術の教師としてミラノへ派遣した人物としても知られる。その結果、アウグステイヌスはこの地でアンプロシウスに出会い、マニ教に近い立場からキリスト教に改宗することとなった。アウグステイヌス『告白』第五卷第一三章を参照のこと。

17 トガは古代ローマ人の上衣でローマの成人市民の一般的な衣服だったが、古代末期には上層階級のみに着用されて身分を示す徴表ともなった。また、ここでのトガはおそらく toga virilis のこと (cf. *Prudentius, in two volumes, with an English translation by H.J.Thomson, The Loeb Classical Library, vol.1, p.3, note a*)。成人に達した青年が着用した衣服である。有産層の子弟はこの年齢で修辞学校に通うのを常としたが、この年代は古くから悪に染まりやすい時期と見なされており、古典期のオウイデイウスの例にも見られるように恋愛沙汰にかまける時期でもあった。

18 *Præfatio, v.7-9, in Prudentius*. プルデンティウスのこの記述は、古くから存在する人生サイクルの捉え方に沿ったものであり、古代では人生を四段階に分ける例を多く見かける。プルデンティウスは『シユンマクス駁論』第二書でもこの人生段階 (*ævi ordo*) について詳しく言及し (cf. *Contra Oracionem Symmachii, Liber II, v.317-334, ibid., vol.2, p.30-33*)。『セウ』

その一方で、初期のキリスト教文学は当初から異教の文化伝統(古典文学及び神話)を敵視し、とりわけ神々の姦淫を批難することによって自己の精神的倫理的優越性と正当性を主張するのを常

では幼年期、少年期、青年期、中年期、老年期の五段階に分けている(人間の人生段階の変化はこのようなものだ。このように人間の自然は交替する。幼児は這い、少年の虚弱な歩みと知力はよろめき、熱した血によって力強い若者はたぎり立つ。それから成熟した堅固さをもつ安定した年代が来る。最後に慎重さは増すが体力は衰え、精神は浄化されて老年の肉体は地に横たわる。この人間という種族はさまざまの時を経めぐって変転する人生を送る。こうして弱々しい存在は最初の試みの中に投げ出され、ただ四つ足獣のように生きた。今や柔らかく教えやすい時期となり、技術を学ぶにふさわしく、さまざまな新しい事どもによって磨かれる。それから悪徳に膨れ上がって火が付き無思慮な時代に突入するが、やがては固く煮詰まって頑健な体となる。そうして今や時が来て、神的なものを、静謐な心の熟慮によってより生き生きと隠れたるものを巧みに探し求め、ついには永遠の救済に心を配ることができるようになるだろう)。この詩句はキリスト教の聖書の教えの解説へと繋がっていくが、少年期を学校に通い厳しい教師に鞭打たれる時期、青年期を悪に染まり無思慮な罪を犯しやすい時期と捉える点は、ほぼ同時代に書かれたアウグステイヌスの『告白』にも共通し、十三世紀のフィリップ・ド・ノヴァールの著作『人生の四段階』にも受け継がれている。ノヴァールについての詳細は、拙著『恋愛結婚の成立―近世ヨーロッパにおける女性観の変容―』名古屋大学出版会、二〇〇六年、第三編第一章を参照のこと。

とした。<sup>19</sup>しかし著述家たちは、そもそもその異教的な古典文学の形式なくしてはテクストを綴る術さえもたなかった。「キリスト教文学と言えるもの」(eine christliche Poesie)の成立が擬古典主義的形式尊重の時代と重なり、まさしくプルデンティウスの作品の書かれた時代に設定されるのは、これ以降のキリスト教文学においては、あたかも後ろめたさを払拭しようとするかのようになり、古典の様式を模倣しつつ自己の著述の護教的根柢、根柢を力説することが定型化していくからである。<sup>20</sup>

『プシコマキア』<sup>21</sup>は、人間の内面における善悪の戦いを扱った叙事詩である。C・S・ルイスはこの作品を叙事詩、つまり文学としては酷評しているが、人間心理の葛藤を自己欺瞞にまで踏み込んで物語った寓意詩としてはその先駆的価値を認めてもいる。<sup>22</sup>ここでは、中世キリスト教のモラル観を規定し近世に至ってもなお繰り返し教えられた〈七つの大罪(悪徳)〉が〈七つの美德〉と対峙し、<sup>23</sup>「信仰」と「偶像崇拜」、「純潔」と「情欲」、「忍耐」と「憤怒」、「謙遜」と「傲慢」、「節制」と「快楽」、「慈善」と「貪欲」、「和合」と「不和」の七対として対決・抗争するさまが、あたかも闘技場アレナにおける熾烈な剣闘士グラフィートルの戦いを見るように読者の眼前に展開される。この作品が中世の知識人を魅了した一つの理由は、キリスト教に特有の魂の在り方への関心が、内面の葛藤を演劇化し外化(視覚化・見世物

化)しうる擬人化アレゴリーに大きな可能性を見出したためでもあっただろう。プルデンティウスの同時代人アウグスティヌスが少年時代から見世物と演劇に熱中していたこと、また後者の著作にも内面の葛藤を擬人的に描写する場面がしばしば見られることなどから推察するならば、対立する感情の擬人化が定着するに当たっては古代の演劇(仮面劇)<sup>24</sup>と見世物文化も影響を与えたかもしれない。それでは、このように内面を重視するキリスト教的倫理観は、前節で扱ったローマ風エレギアの恋愛、その都市・流通・モラルとの問題連関をどのように捉え直し、自己の文脈へと移し替えたのだろうか。本稿ではこの問いに答えるために、これら七つの大罪のうち、とりわけ「快楽」Luxuriaに焦点を当ててこの作品全体を考察することにした。というのも、エレギアの中心テーマであり、詩人の心の葛藤の源でもあったアモルとウエヌスの司る恋愛は、同様に心の葛藤を描く『プシコマキア』ではほとんど言及されていないが、それにもかかわらず、ローマ風の恋愛をめぐる問題連関そのものは、異教神話の装いを捨てて拡散しながら、「快楽」のイメージのなかにきわめて印象深い姿をとって現われているからである。

この作品の全体的構成を把握するために、まず七つの大罪を代表する寓意像について簡単に説明しておきたい。プルデンティウスの擬人法は、ラテン語名詞の性と関わって、七つの大罪と七つ

の美德をともに女性として登場させている。「信仰」と対決する大罪「偶像崇拜」は「異教の古代神崇拜」として、本来は旧約的・ユダヤ教的文脈にあつたはずの偶像がローマ化されている。その闘いの描写もまた、明らかにローマの闘技場を想わせる。二つめの大罪「情欲」は汚れた「娼婦」meretrix、「淫売」prostibulum（前

者は動詞 mereto「もつける、稼ぐ」から、後者は動詞 prostio「（売り手によって広場に）陳列されている」から来ており、ともに〈高い〉と密接に関わる意味をもつ）として、聖母マリアに象徴される「純潔」と対峙する。この戦闘では旧約のエピソード、ホロフェルネスの寝首をかいたユーディットを「情欲」に対する旧約的・律法的な勝

19 初期の護教文学はしばしば神話に語られる神々の不道徳な関係、あるいは豊饒儀礼や秘祭に顕著な性愛的生殖的表象を糾弾した。これはギリシア語の著述家も同様で、アレクサンドリアのクレメンス（一五〇年頃―二二五年頃）の『ギリシア人への説得』も、ギリシア神話と秘祭を信じる人々にその宗教的核心をなす性的事象を曝露し批難している。Clement of Alexandria, *Protreptikos*, 1919<sup>f</sup>, 1979, Loeb Classical Library. これらの表象は、古代宗教の豊饒儀礼的性格を考えるならばある意味当然だったろう。四世紀末のアウグスティヌスも、「古典文学を売買している」文法学校の教師たちがユピテルの姦通の物語を教えることを批難している（『告白』第一卷第十六章）。ブルデンティウスもまたこのキリスト教的異教批判の伝統に沿って、シユンマクスの異教崇拜を難じる著作（前掲書、注参照）でギリシアローマ神話の神々の性的放縱と逸脱に言及している。

20 Klaus Thraede, *Studien zu Sprache und Stil des Prudentius*, 1965, p.25-27.  
21 『シニコマキア』の邦訳は、ブルデンティウス『日々の賛歌・靈魂をめぐめる戦い』家人敏光訳、創文社、一九六七年、を参照したが、本稿に引用した箇所については家人訳を参照しつつ、Loeb 前掲書のラテン語テ

クストから必要に応じて訳し直した。

22 Cf. C.S.Lewis, *The Allegory of Love: A Study in Medieval Tradition*, 1936 (rep. 1970), IV (C.S.ルイス『愛とアレゴリー』ヨーロッパ中世文学の伝統』玉泉八州男訳、筑摩叢書、一九七二)。「あれよりも早い詩は考えられないほどの出来」、「失敗作」などと手厳しい。

23 ブルデンティウスの〈七つの大罪〉はルイスも指摘するように、後に定着するものと正確には対応していない。その起源は四世紀のエジプトの修道士ポンティコス著書に見られる八つの「枢要罪」とされ、グレゴリウス一世によって七つに纏められて中世キリスト教世界に定着したが、大罪と美德とを対にして心中の葛藤として表象した例としてはブルデンティウスが一番早い。しかし造形芸術においてこのテーマが繰り返し制作され、とくに大罪と美德が対照的に示されるようになるのは十五世紀末からである。

24 古代の演劇が基本的に仮面劇であったことと擬人化アレゴリーの発展とは、その根底において繋がるものをもっているように思えるが、これについては今後機会を改めて考察したい。

利者として意味づけながら、「情欲」の新的、勝利者として、より純化された存在である聖母マリア、<sup>25</sup>キリスト、そしてその洗礼の場、ヨルダン河への言及がなされている。それから「忍耐」と対決する大罪「憤怒」が、ギリシア・ローマ神話を物語る叙事詩のように、異教の軍神マルスの名を掲げて英雄的な戦いぶりを發揮する。怒りに狂って自刃して果てた大アイアースの如く、「憤怒」もまた敗北の屈辱に憤って箭を地面に逆さに突き立て自害するのである。しかし、異教的叙事詩から借用したモチーフが目につくこの三番目の戦いも、結局は「忍耐」によって勝利する旧約のヨブの挿話で締め括られている。

そして四番目には「謙遜」に戦いを挑む大罪「傲慢」が女武者として登場する。ここでもウエルギリウスまがいの英雄叙事詩の影が濃厚である。「傲慢」は自身を威圧的に見せるために、「高慢な額の上方に」かつらまで用いて「高く編んだ塔型の髪」を作っている。すなわち、その威力はまがいものに過ぎないことが示唆される。<sup>26</sup>ギリシア・ローマ的な活動的生は、広場、戦場など衆人環視の場で「大きな言葉と大きな行為」<sup>27</sup>を示すこと、威勢を示すことを求めた。この文化型に生きる「傲慢」は、神話的英雄が戦場で敵将に向かって言葉戦いを挑むように、「謙遜」を威嚇して高々と頭を掲げ滔々とまくし立てる。彼女が代表―表象するローマの自由人とは、軍人として、政治家として、公的―活

動的生を追求し、そこに限りなく大きな意義と名誉を見出した人々だった。しかし、ひたすら高みを目ざす「傲慢」は、勢いはやって狡猾な「詐欺」が秘かに野原に掘った陥穽に真つ逆さまに落ち込むことになる。公的広場における上昇と失墜、栄光と汚辱の両極性。その瞬間を捉えて、「謙遜」は忠実な「希望」から渡された剣をふるってその首を切り落とすのである。この場面の「謙遜」の行為は、すぐ直後で巨人ゴリアテの首を刈る勝利者ダビデになぞらえて描写され、異教の帝国ローマに対するキリスト教の勝利が暗示される。<sup>28</sup>

ここまでの戦闘に登場する四つの大罪（悪徳）の擬人化アレゴリーは、女性として描かれてはいるものの、「情欲」を除いては特に女性的属性を強調するわけではない。それらは単に名詞の性に従ったまで、という印象を与える。「娼婦」としてネガティブではあるが唯一女性性と関わる大罪「情欲」もまた、その汚れた悪魔的性格を示唆する形容詞以外には、現実の人物らしく具体的な細部描写がなされるわけではない。このような先行する大罪に比較すると、五番目の大罪「快樂」は極めて異色の存在であり、古来男性詩人が恋愛の対象として造形するのを常とした蠱惑的な女性そのものである。

しかし、ローマの古典文学、とりわけ恋愛詩との関連で注目する『プシコマキア』の「快樂」像に立ち入る前に、ここで「快

楽」と訳出した *Luxuria* の語義について少し説明しておかなければならない。<sup>29</sup> 本稿では、プルデンティウスの擬人化された *Luxuria*、すなわち大文字のそれを「快樂」と訳し、他方、エレ

ギアに言及されていた普通名詞としての *Luxuria* を「贅沢」と訳している（二九頁参照）。ローマ風エレギア、ひいてはローマ文学の最盛期から『プシコマキア』の成立までは四百年以上の距りがあるが、この訳語の弁別はその時間的差異に基づくものではない。むしろ、恋愛の対象である恋人（女主人）の物質欲、高価な商品（贈り物）への欲望と関わる狭い文脈に規定された一面的な「贅沢」が、大文字の擬人化によってまさしく意味の人格化を蒙

25 つまり、律法は結婚後夫を亡くした寡婦が再婚せずに貞潔を守るという美德を重んじているのに対し、キリスト教がより高度の美德、すなわちマリアの処女性・純潔を尊重していることを意味していると思われる。  
26 とはいえ、プルデンティウスがここで「傲慢」と呼ぶものは、ギリシア・ローマの英雄叙事詩の世界が示すように一つの文化的な振るまいの型を踏襲しており、その文化のなかに生きる人間にとっては公的広場の賞讃をもたらず美德に通底している。

27 ホメーロス『イーリアス』第九書。  
28 プルデンティウスの描くこの戦闘場面には、ワールブルクが注目した勝利の情念型 (*homo victor*) の典型例、すなわち、刈った首を高々と掲げる勝利者ダビデとその女性版であるマイナデスの首刈り女ユーディッ

り、その内包（インクルード）が人としての多面性・立体性を得るという現象を「快樂」という訳語がよりの確に示しうるのではないかと考えるからである。

*Luxuria* の動詞形 *luxurio* は本来「増殖する」、「繁茂する」を意味し、語の根幹に〈過剰〉のニュアンスが示唆されている。それは単なる豊かさ、ニュートラルな豊かさではない。エレギアにおける *Luxuria* の語義「贅沢」はこの原義の外延として派生したものである。それは、本来的に〈必要〉の支配した自給自足経済が次第に余剰（過剰）を生み、その余剰が交易によってさまざまな商品に姿を変え大量に流れ込む都市社会において、人々が〈必

トが共に登場している。ヨーロッパにおける戦闘勝利の情念は、「血の滴る髪束を掴んで高くさし上げ」（『プシコマキア』二八三行）る型に凝縮されて保持され、この情念が甦るとき、そのつどそのような型として想起された。プルデンティウスはユーディットを、情欲に汚れた異教の將軍ホロフェルネスに対し「律法の影の下で」（六六行）勝利を収めた婦人（寡婦）、「われらの時代」（キリストの来臨以降の時代）と純潔のマリアを予兆する存在と位置づけている。つまり寡婦と処女の位階の差が、律法とキリストの福音の価値的位階を反映していると解釈しているのである。

29 『プシコマキア』の家人訳でも、*Luxuria* は「快樂」と訳されている。  
30 このことはもちろんすべての擬人化アレゴリーに妥当しなければならぬが、ここでは深く立ち入らず、機会を改めて考察したい。

要)を超えたもの、珍しいもの、洗練されたものを求めるようになっていく心性と深く関わっている。当時すでに田舎の贅沢が存在したとしても、それは都市の贅沢が反照した姿に過ぎなかっただろう。つまり、(過剰)がその位相をずらす形で贅沢を生み出すことにローマ人は気づいていた。そして、(ローマの平和)の実現以降、<sup>31</sup>帝国の首都ローマには文字通り贅沢の限りを尽くす富裕市民層が出現していた。<sup>32</sup>しかし、『「プシコマキア」において、Luxuriaは更なる変身を遂げている。珍しいものであれ洗練されたものであれ、個々の(物(商品))と緊密に結びついていたLuxuriaが、溢れんばかりの贅沢品(客体/対象)によって満たされることを欲する主体の内なる感性・感覚に転義かつ転位し、贅沢を楽しむ女の姿をとって、「快樂」Luxuriaそのものとして、そのような主体的感性・感覚の化身として現われるからである。プルデンティウスは「快樂」の登場する場面を次のように描写している。

西の涯から、敵(の悪徳女)がやって来た

快樂は、<sup>ルクスリヤ</sup>名声を失って久しいにもかかわらず

髪には香油を塗り、定まらぬ目つきとも憂い声

享楽に墮落した彼女にとって人生の意味は楽しむこと

麻痺した魂を軟弱にし、恥知らずにも快い誘惑に

身をまかせ、柔弱な諸々の感覚を甘やかしている

冒頭で「快樂」(その根源にある「贅沢」も含めて)が「西の涯」あるいは「西の地域」からやって来たたと述べられているのは、奇妙な印象を与える。古代ギリシア以来、「贅沢」は伝統的に東の地域(東方)を特徴づけるものとされ、ローマ風エレギアに登場する奢侈品(二八頁参照)もすべて東方からもたらされるのを常としたからである。<sup>33</sup>しかし、帝国ローマの繁栄と頹廢を経て国勢が傾き始めたこの時代において、西方起源の「快樂」とは、まさしくローマ的な快樂を意味したのではなかったろうか。キリスト者となったプルデンティウスは自己の魂を托する場を、ローマの東に位置するキリストの聖地、聖書に語られる東方の地域に設定し、そこから帝国の中心地ローマを見やっているとのではないか。<sup>34</sup>キリスト教信仰を得た彼にとつて、三代のローマ皇帝に仕えた自身のそれまでの世俗的栄達と富貴はとうに意味を失っていた。これが、「快樂」は「もう長いこと<sup>プアリア</sup>名声を失っている」と言われる一つの理由だったろう。そしてこのことはおそらく、単に彼個人の人生経験に即した言表であっただけでなく、かつて世俗の名声を求めたことのある改宗したキリスト者に等しく当てはまる道理でもあっただろう。巨視的に見るならば、繁栄する帝国にキリスト教の教えが到来し広まったという事実そのものが、ロー

マの世俗的生活と緊密に関わる「贅沢」／「快樂」の「名声」を失わせることになった。もちろんそのような生活は一部の富裕層のみが享受しえたものではあったが、だからこそ時の「名声」と結びつき、多くの人々の羨望的ともなりえたのである。しかし、キリスト教の浸透とともに広まった新しいモラルは、世俗的生活<sup>35</sup>とそれに伴う快樂を全面的に否定するものだった。政治家／軍人／弁論家としての公的生活（活動的生）を誇りとしたローマ

人の姿は「傲慢」の描写にもつぶさに透かし見られるが、その勝利者となる「謙遜」は輝かしい公的生活を否定するモラルであり、他方、「快樂」と戦って勝利を収める「節制」は享樂的な私的生活を否定するモラルだったと言つてよい。  
さて、「快樂」は頹廢的な逸樂の女、ふしだらで蠱惑的な女として登場する。彼女は「情欲」のように性欲と直接的に結びつく娼婦そのものではなく、「節制」の引き連れた兵士たちをその

31 アウグストゥスが皇帝としてローマで帝政を開始した前二七年から五賢帝時代の終わりまで（後一八〇年）の比較的安定したローマ帝国繁栄期を指す。歴史家ギボンの造語である。

32 ローマの富裕市民層の頹廢的な生活の一例は、ネロ帝の側近であったペトロニウスの『サテュリコン』に登場する成金解放奴隷トリマルキオとその宴会の場面に活写されている。

33 *occiduis mundi de finibus* をここでは「西の涯から」と訳したが、Shanzer によれば単に「西の地域から」という訳も可能。因みに、「快樂」の元である「贅沢」（金銀財宝、奢侈品の山）は、旧来のギリシアと対比されたアジア（東方＝オリエント）を特徴づけるイメージだった。古くはホメーロス叙事詩に歌われるトロイア、ヘロドトスの記述するペルシャは、自由の民であるギリシア人には到底及ばぬ富＝「贅沢」を王のみが恣にする専制の国であり、彼らの自由イデオロギーが最も敵視する国だった。そこでは、頂点に立つ者のみが万人の自由を搾取しつつ「贅沢」の限りを尽くしており、だからこそそのような国は自由の民によって滅ぼされて当然だと考えられ

たのである。Shanzer は、プルデンティウスのこの箇所の参照資料として、共和政ローマの著述家・政治家キケロ（前一〇六～四三年）の作品 *Pro Murena* 『ムレナを弁護する』を挙げているが、そのルーツはずっと早くギリシアに遡るべきだろう。cf. Danuta Shanzer, *Allegory and Reality: Spes, Victoria and Date of Prudentius's Psychomachia*, in *Illinois Classical Studies*, XIV, 1989, p.357. の従来のアジア観に沿って Shanzer もまたこのでルくスリアが西方からやって来たとされるのは「奇妙」だと述べている。  
34 プルデンティウスはスペインに生まれ（出生地はいくつか挙げられているが特定できない）、中年期には三代の皇帝に重臣として仕えたようだが（序一九～二一行）、五〇代になってからキリスト教への信仰に目覚めて神に奉仕する晩年を送り（序二二～四五行）、スペインで死んだと推測されている。cf. Prudentius, *ibid.*, Praefatio.  
35 政治家／軍人／弁論家としての公的生活と榮達者の享樂的な私的生活をともに含む。

感覚的で柔弱な魅力によって籠絡する。<sup>36</sup>最初の場面で、「快樂」は髪に香油を塗り、もの憂い様子で欠伸をしながら、徹夜の酒宴についている。「節制」が挑む戦いの合図を聞いた彼女は、「酒とバルサムの香りに足をふらつかせ、花々を踏みつけて戦闘へ赴く(三一九～三三〇行)。宝石、金、銀、琥珀に飾られた豪華な戦車に乗り、「節制」の兵士たちに向かっては「スマシレを投げつけ、バラの葉で戦い、花かごを敵軍に撒き散らす」(三三六行)という新戦術である。香油、バルサム、花等々、感官を麻痺させる「邪悪な甘い香りが口、心、そして武器を圧倒し」(三三〇行)、「徳の乙女たち」(「節制」とそれに付き従う美德)の兵士たちはみな骨抜きにされる。「快樂」は、奉仕する奴隷たちの「女主人」*domina* (三四二行)、「居酒屋」*ganca* (三四三行)を取り仕切るふしだらな女将、「妓楼」*Iupanar* (三七九行)への導き手、そこに待る「踊り子」*salatrix* (三八〇行)のイメージに次々と重ね合わされる。前述したように、「女主人に奉仕する」*servire dominae*という表現は、エレギアの恋愛関係に典型的なものである。「居酒屋」にはもちろん酒の相手を務める女たちが付きもので、<sup>37</sup>「妓楼」は説明するまでもないが、「踊り子」もまた笛吹き女などとともに古代の宴席に欠かせぬ存在だった。<sup>38</sup>ギリシア・ローマ喜劇にもしばしば見られるこのようなイメージは、古代から中世、近世、そして近代まで、〈魅力的な女〉の周辺に常につきまといてきたが、

ここで〈魅力的な女〉として表象される「快樂」とはまさしく、先に「娼婦」「淫売」と等置された「情欲」、すなわち売買と直接的に結びついた「情欲」が、商品の媒介する「贅沢」*Luxuria*によって洗練された姿と考えてよい。つまり、流通が可能にする「贅沢」(これもまた単なる豊かさではなく、多様性に富んだ豊かさである)こそが、それ自体売買に関わるものと見なされた裸の「情欲」に高価な薄物のヴェールをまといわせ、魅力的な「快樂」*Luxuria*へと変貌させる主要因なのである。

しかし、「贅沢」が生み出す「快樂」はなぜ〈魅力的な女〉でなければならないのか。それは名詞の性に端を發したイメージ連鎖・イメージ増殖の結果に過ぎないのだろうか。少なくともこの増殖過程においては、古くから認められる女性の流通性・商品性が「贅沢」の流通性・商品性と呼応し合い、相互に増幅し合ってイメージの興行を拡げてきたように見える。「贅沢」は女性の性の値段をも引き上げる。そして、エレギアに見られるように、最終的には性を売り物にする女たちもまた、その意図を故意に曖昧にしながら、あるいはキュンティアのように時には恋愛、意に本気になりもしながら、この価値切り上げの原理を知悉し、ことさらに「贅沢」(贈り物)を要求することになる。しかしそのためには、彼女たちは〈魅力的〉でなければならない。つまり「贅沢」に支えられた「快樂」の化身として、自身「快樂」を提供す



る女でもなければならぬのである。とはいえ、「快樂」は女が提供するものとは限らず、その根幹をなす「贅沢」も専ら女の嗜好というわけではない。したがって「快樂」を女性によって代表―表象させる擬人化アレゴリーが後世に及ぼした決定的な影響力を考えると、概念内容を規定し定着させるイメージの力の強大さに驚嘆せざるをえない。それはまた、「快樂」を記述する者が長い間ほとんど常に男性に限られていた、という事実とも大いに関係していただろう。「快樂」と「魅力的な女」、鶏が先か、卵が先か。いずれにせよこの堂々巡りの関係は、流通の本来的互換性、そしてある時期に至って固定し加速する兌換性の問題に通底して

いるように思える。

さて、プルデンティウスは「快樂」の蠱惑的な姿を念入りに描写してみせる。彼女は裸の「情欲」には不可能な、「情欲」を包み隠す、贅沢で洗練された装置と手管によって、「節制」の率いる兵士たちすべてを囚にする。それにもかかわらず、ここでは奇妙にも愛が言及されることはまったくない。それはおそらく、「魅力的な女」が一方的な誘惑者として振舞い、人間的な双方向の関係性を形成することがないからである。エレギアはあくまで男性詩人の立場からではあったが、恋人との関係を歌っていた。ところが「快樂」は、女として人格化されてはいてもそこで恋が語

36 家人敏光は、『プシコマキア』はそれぞれの「悪徳」について述べる詩行の長さから見ても、「中央の部分（傲慢、快樂、貪欲）にクライマックスを設けることを意図」（括弧内は筆者）しており、「肉体的情欲の悪徳から理性的、精神的悪徳へと順を追って展開されている」と述べている。家人敏光「プルデンティウス『プシコマキア』小論」、『カトリック研究』53、一九八八年、上智大学、三五頁、参照。

37 したがって、*causa*の男性形 *causo* は、この女たちと遊び散財する「放蕩者」を意味する。

38 この「踊り子」の登場する文脈から判断するならば、プルデンティウスはここでむしろ、聖書に描かれる東洋的な王の酒宴、例えば洗札者ヨハネの首を所望したサロメが踊ったヘロデ王の酒宴を思い浮かべてい

たかもしれない。「快樂」が「踊り子」として現れる酒宴では、「金色のバンドをつけた金のターバンとナルドの香油を滴らす髪」（三五九―三六〇行）が描写され、オリエント風の世界を思わせる。「ナルドの香油」については旧約の「雅歌」一章一二節に「王様を宴の座にいざなうほど／わたしのナルドは香りました」とあり、ここでも髪に振りかけたものと思われる。冒頭の宴席の場面で「快樂」が髪に香油を塗っていることと併せて考えるならば、ナルドはオリエントの酒宴に侍る女たちの身繕いに不可欠のものであったのだろう。しかし、プルデンティウスはこの酒宴に「ファレルノ葡萄酒を氾濫させて」（三六七行）おり、他の箇所も同様だが、モチーフが連想させるイメージ方向は一定していない。

られるわけではない。彼女は兵士たちすべて、ひいては男たちすべてを相手にする抽象概念に過ぎない。しかしむしろ、「快樂」をあくまで「快樂」に過ぎないと見なすこと、「快樂」から、キリスト教支配下で根強く生き延び、いつまた不意に甦って勢いづくかも知れぬアモルとウエヌスの力を排除すること、そして帝国ローマと縁の深い異教の母・息子神<sup>39</sup>の司る業（アモルが矢を放って恋する者をその対象へと導き、ウエヌスがそれを性愛によって固く結びつける）を、徹底的に彼らとは無関係の、ひたすら感官を惑わす、感覚のみが支配する「快樂」に貶めてしまうこと、神々の業と見なされてきた愛が結ぶ男女の關係性を断ち切り、不浄な感覺的欲望そのものとしてそこから神秘性を奪い去ること、このことによって初めて、プルデンティウスは異教的愛を無力化し、周辺へと追いやり、もっぱらその悪徳を非難することができたように見える。

ところが彼は、「快樂」と「節制」の戦いを物語る最後の段になって、一度だけ大文字のアモル *Amor* すなわち異教の愛神<sup>アモル</sup>を登場させている。40それは、すでに「快樂」が無惨な死を遂げ、彼女の下で戦っていたその「追隨者たち」がこぞって逃げ出す場面である。アモルは「恐怖のために顔は蒼白となり／毒矢と肩から滑り落ちた弓と／地上におちた矢筒を自分の後方に置きざりにした」(四三六―四三八行)。アモルは「快樂」の死によって潰滅的な

痛手を被り、自身の属性、愛を仕掛けるための道具を捨て去って逃走する。愛を射かける矢（キリスト教的立場から見れば毒矢）を失ったアモルはもはやアモルではない。そして「快樂」に追隨し仕えるアモルの位置づけそのものが、神としての權威を奪われていることを示しているのである。アモルの失墜は、ウエヌスのさらに完璧な失墜によって反復され強調される。性愛を司る女神である彼女は、おぞましく不浄な存在としてもはや登場する機会さえ与えられない。その代わりに、神話的な原初のエネルギーを奪われ、その表層的属性のみが擬人化された「魅惑」*Venusitas*<sup>41</sup>がちらと姿を見せるのだが、すぐにまた他の追隨者たちの惨めな退散に後れまいと蒼惶として戦場を去ることになる。「魅惑」の花環はちぎれて垂れ下がり、首と頭の黄金の装具はゆるんでほどけた。

神話的ルーツと比較すれば、エレギアにおいてすでに二面化していたアモルとウエヌスの姿はここで、キリスト者としての自覚に立つプルデンティウスによって危険な異教的魔力を殺がれ、キリスト教的美德「節制」に対比される悪徳（大罪）II「快樂」の一郎党に成り下がっている。キリスト教がことのほか性愛を敵視したのは、人間性を揺さぶるその根源的な情念が、魂の救済をめざす教えの浸透にとつて最大の障碍であると見抜いたからだったろう。しかし、アモルとウエヌスはまさしくこの根源的な情念を

司る母息子神であったから、一つの著作のなかで、一人の著述家によって、否定され亡きものにされても、あるいはキリスト教会が彼らに言及することを異端として禁じても、臆せず脈々と生き延びていった。プルデンティウスは『シユンマクス駁論』において、ウェヌスとマルスの情事やユピテルを筆頭とする神々の不倫に触れ、そのような恥ずべき神々を高貴な血統の祖として崇める名氏族の不条理を醜悪なものとして非難している（一七二―一九二行）。しかし恋愛は条理からの逸脱を強いるほど闇雲な情念として、人々の心に長きにわたってアモルとウェヌスの姿を刻み続けた。

「快樂」の率いる軍隊が潰滅し、「毒矢」を失ったアモルと毒気を抜かれたウェヌス<sup>39</sup>「魅惑」も立ち去った後には、逃走の道すがら至るところに、〈魅力的な女〉Luxuriaの追従者たちにふさわしい贅沢品、「髪止めピン、幅広リボン、細長リボン、ブローチ、

39 神話においてローマ建国の父とされるアイネイアースの母はウェヌス女神であり、ユリウス・カエサルの子ユリウス家はアイネイアースに遡る一族とされたので、カエサルの養子であった初代皇帝アウグストゥス以来、ローマではウェヌス信仰が盛んだった。  
40 家人訳はこのアモルを「愛欲の悪徳女」としており、大文字のアモル Amor の異教神話的文脈を無視して全面的に擬人化アレゴリーに移し替えている。

41 Venusias は Venus の属性を表す名詞であり、美、優美、魅力、繊細、

ヴェール、胸衣の紐、頭飾り、ネックレス」などが飛び散っていた。第六番目の大罪（悪徳）である「貪欲」Avaritia は「懐に大きなポケットを付け」、これらの高価な品すべてを我がものとする女として登場する。彼女はまず、「口を開いて華美で空虚なものに見とれ」、「落ちていた金貨を拾う」ことから始める（四五五―四五八行）。それから急速に暴力的な本性を露わし、自身がさまざま悪徳の根源であること、これまで欲得ずくの世間の人々を大いに惑わせ争わせて不幸に陥れてきたことを誇り、戦場で猛り狂う。そして今や、地上の利得を軽蔑するキリスト教の教えによって連戦連勝の行く手を阻まれると、武具を収め、たちどころに「厳格な顔と衣服」をまとって「儉約」の女に変身し、「子供のための配慮」という美名の下に「略奪し、盗み、分捕り品を隠匿する」（五六二行）行為に転ずる。<sup>42</sup>しかし「こ」でも、すべてを惜しみなく与える「慈

快樂などの意味をもつ。

42 プルデンティウスの「貪欲」の姿はこのように変転し続け、明確な像を結ばないが、ローマ喜劇ではプラウトゥス『黄金の壺』の守銭奴（老人）が「貪欲」を代表する人物だった。しかし中世になると、老婆としてイメージされることが圧倒的に多くなる。これは擬人化アレゴリーが中世に受け継がれ、Avaritia という名詞の性が強く作用したからではないかと思われる。これに対し、古代喜劇は中世を通じて長く忘れ去られ、ルネサンス期に至って漸く復活した。

善)「活動」Operatio<sup>43</sup>が「貪欲」の外見に惑わされた諸徳の乙女たちの目を開かせ、「永遠の富」のために地上の富を捨てる彼女が乙女たちとともに圧倒的な勝利を収めることになる。

プルデンティウスは「貪欲」の剛柔二面的な相貌を巧みに描き分けているが、キリスト教モラルの堅固で戦鬪的な枠組が、これまで同様、その人格に余りにどぎつい色調を与えているため、「貪欲」と贅沢、恋愛との繋がりがすぐには見えにくい。しかし彼女が最初の場面で、「快樂」とその部下たちが戦場に残した「華美で空虚なもの」に口を開けて見とれる女であったことを想い起すならば、贅沢が「貪欲」の引き金となることにプルデンティウス自身も気づいていたことが分かる。この両者の関係は、すでにタイプツルスやプロペルティウスのエレギアでも、恋人に贈り物を要求する乙女の姿として言及されていた(二八頁)。物質的過剰は贅沢を生み、それが恋愛と「快樂」の洗練をもたらず一方で、他方では「貪欲」を生み、欲心を増殖させ、商業(金貸し)の発展を促し、挙げ句の果てには恋愛と「快樂」を破綻に導く力ともなる。過剰が生み出す流通の自走メカニズムは、閉じて充足した世界、平和な田舎に亀裂を生ぜしめ、都市の発展と拡大に寄与す

ることになった。

「貪欲」の後には最後の大罪(悪徳)「不和」が登場し、「和平」の乙女たちの軍隊にまぎれ込んで斬りつけるが、あえなく組み伏せられて七つの戦いは大団円を迎える。彼女が「別名異教の女」(七一〇行)と名乗ることは、前述したようなプルデンティウスの時代状況とも直接的に関わっていないが、これは六番目の大罪「貪欲」のもたらす「不和」でもあり、ここに淵源をもつ商行為、とりわけ「利子」*usura*を追求する行為を異教的なものとして断罪するキリスト教の批判に通底していたらう。商業は額に汗して働くべきアダムの子孫の地上の運命に逆らい、なおかつこの子孫から搾取する行為だったからである。そしてまた、「異教の女」とは贅沢に憧れ、「快樂」を求め、アモルとウエヌスを崇拜する女でもあった。

次章では、アレゴリーが全盛期を迎えるキリスト教中世において、ウエヌスとアモルの母―息子神がどのような変貌を遂げ、それが中世に広く読まれた『プシコマキア』に説かれるモラルとどのように関わっていたのかという問題について探ってみることにしたい。(以下次号)

43 operatio は「仕事」「活動」を意味する女性名詞。前後の文脈から Operatio が人々を助ける慈善活動の擬人化であることが読み取れる。